



「キューティ・ブロンド」"Legally Blonde" ●●● 第14回

"It's called the 'Bend and Snap'"

「かがんでパツ」

ノーテンキなステレオタイプも究めれば完成度はこんなに高くなる。
自分を捨てた恋人を取り戻すべく、ハーバードに乗り込んだ
ブロンド娘のお話は、ポップで活きのいい英語が魅力。

文=中野香織



製作費こそわずか1800万ドルなのに、トータルで1億ドルに迫るスーパーヒットを記録。
はやくもパート2の製作が決定している。4月末からロードショー。

「ここは自分の居場所じゃない」という声がフレックシマンのなかから聞こえはじめるのが、ゴールデン・ウィーク前後の今の季節です。

五月病とも呼ばれる環境不応症には、もちろん専門家の助言が必要なケースもありますが、新しく帰属することになった集団のライフスタイルやファッションについていけないという程度の軽症ならば、ひょっとしたらこの映画が治してくれるかもしれません。

「キューティ・ブロンド」です。

原題は'Legally Blonde'、「合法的にブロンド」。「パープーに見えるブロンドだけど法律家として中身は適格」というほどの含意があるでしょうか。ビバリー・ヒルズでおしゃれと社交三昧の生活を送っていたブロンド娘が、'too Blonde'（ブロンド過ぎ）な自分を妻にふさわしくないと捨てた恋人の愛を取り戻すべく、そのあとを追ってハーバード・ロースクールへ乗り込む……というお話。

と聞くと、いかにも話の先が見えてありがちな映画みたいで、実際、お約束どおりの **fish-out-of-water comedy**（居場所を間違った人が巻き起こすコメディ）ではあるのですが、これが90分、気持ちよく笑わせてくれるのです。皮肉も社会風刺もひねりも加えず、細部にいたるまでとことん能天気なステレオタイプだけで完結させたのがかえって効を奏したようです（その意味で、きわめて完成度が高いといえます）。監督はオーストラリア出身のロバート・ルケティックで、これが劇場用映画のデビューになります。脚本はカレン・マクラー・ラッツとキルスティン・スミスの二人によるものですが、法律のロジックをギャグにし、セレブやファッションやグルーミングに関する女性誌的な知識を駆使して笑いをとる、ポップで活きのいい英語が魅力です。

たとえば、ヒロインのエル・ウッズ（リーズ・ウィザースプーン）のロースクールでの自己紹介。

Last week I saw Cameron Diaz at

Fred Segal, and I talked her out of buying this truly heinous angora sweater. Whoever said orange was the new pink was seriously disturbed.

（先週、フレッド・シーガルの店でキャメロン・ディアスがひどいアンゴラ・セーターを買おうとしていたのをやめさせたの。オレンジがピンクに代わる新しい色だって言った人はひどい勘違いをしているわ）

フレッド・シーガルはセレブご用達のセレクトショップ。「ロシア文学で修士号を、生物学で博士号を取り、ソマリアで寄生虫駆除のボランティアをした」という男子学生（演じるオズ・パーキンスは「サイコ」のアンソニー・パーキンスの息子!）や、「女性と戦闘の歴史で博士号を取り、レズビアン団体を率いて酒酔い運転反対のデモを執行した」という女子学生らの頭よさげな自己紹介が続いて、上のセリフがくるわけです。

エルの場違いぶりを強調するセリフではありませんが、「ファッションに詳しいのはバカ」という偏見をとりのぞいて別の見方をしてみれば、実はエルがクラスメイトにひけをとらないほどの「高い専門性」と「積極的行動力」の持ち主であることをちゃんとアピールする内容になっていたりして。

別の見方。そういえば、これをいかに提示するかに法律家の力量が測られるのでした。厳しいストロムウェル教授も最初の授業でこう言っています。

The law leaves much room for interpretation.

（法律はいかなる解釈をすることもできる）

そもそも、場違い娘エルがロースクールに入学許可されるという事態も、ほかならぬこの基本原理に忠実な教授陣の議論の成果のたまもでした。コッポラ制作 (!) のエルのビキニ姿の入学申請用ビデオ・エッセイを見ながらおこなわれる、入

学審査担当の教授陣の議論がそれです。

「ファッション販売促進専攻」であることに疑問を投げるある教授に対して、別の教授は、こう弁護します。

Well, sir, we've never had one before. And aren't we always looking for diversity?

（たしかに前例がありません。でもわたしたちは常に多様な学生を受け入れようとしていたのではありませんか?）

さらに、「女子学生社交クラブでの慈善事業としてフェイク・ファーのパンティをデザインした」ことに眉をひそめる教授に対して、別の教授が弁護します。

She's a friend to the animals as well as a philanthropist.

（彼女は博愛主義者であるとともに動物愛好家でもある）

法律と同様、ひとつの事実はいかなる解釈をすることもできるという模範 (?) 例ですね。

とはいえ、この映画の命はあくまで、理屈っぽく解説すればするほど肩透かしを食らってしまうような能天気ぶりにあります。細部にそれが冴え渡っているのですが、あまりのばかばかしさに強烈に記憶に刻みつけられた英語を最後にひとつだけ紹介します。エルがママから伝授されたという、'a little maneuver'（手管）です。

It's called the 'Bend and Snap'.

「かがんでパツ」

「男性の関心をひく確率 98%、さらにディナーに誘われる確率 83%」という 'Bend and Snap' とはいったい? 気になる方は劇場でご確認を。